

カダザンドスン族に関わる豆知識

小林 征二 (koba-sei@cube.ocn.ne.jp)

以下の文章は、参考文献に掲げた記事と僅かばかりの筆者の知識を組み合わせで構成しました。参照した記事は、著作者の権利であり、筆者は和訳しただけです。どの部分がどの記事を参照したかについて逐一記載しないこと、参照した箇所に誤訳がある可能性があるかもしれないこと、参照した記事の信憑性について保証する能力がないことなどをご容認ください。カダザンドスン族に関してより詳細な知識を得たい方は参考文献を一読されるとよいかもしれません。本文章は、インターネット上で公開されているカダザンドスン族に関する参考文献に挙げた記事を要約して紹介するものです。筆者はカダザンドスン族の起源や歴史に関心を持っており、かかる情報を紹介していただければ幸甚に存じます。

サバ州で最大の人口比率を占めるのは、カダザンドスン族です。以前、カダザンとドスンは、方言は相違しましたが、ほぼ同じ言葉を話し、社会的にも文化的にも類似していました。大まかに言うと、カダザンは、サバ州の西海岸（ペナンパン、パパール、イナナム、ツアラン）に住み、ドスは、内陸地の丘陵や山間部（テノム、タンブナン、ケニンガウ、ラナウ、など）に住んでいました。1989年にカダザンとドスンの（支族レベルで32からなる）多民族コミュニティの社会的、文化的、経済的および政治的な成長と発展を促進するために、二つの民族グループを統一しようという政治的決定がなされました。

‘Dusun’という語は、マレー語で村または果樹園という意味です。初めて渡来した英国人がマレー語を話す人に原住民について「彼らは誰か？」と尋ねたところ「村人または果樹園の人々」と答えるために「Dusun の人々である」と返事をしました。英国人は、意味は分からなかったが、彼らをDusunと呼ぶようになったということです。‘Kadazan’という語の起源には、いろいろな説があります。第一は、その語が、町を意味する‘kakadazan’から来たという説です。第二は、その語は、店(kedai)という言葉から派生したたぶん町の人々を意味する‘kedaian’から来たという説です。第三は、その語は、‘Kedayan’から来たというものであり、その名の民族グループは、ブルネイやラブアンに存在しています。第四は、‘Kadazan’は、「人々」を意味するという説です。第五は、政治家による造語であるという説です。どうやら第四の説が有力なようです。

カダザンドスン文化協会 (Kadazandusun Cultural Association : KDCA) という非政治的団体があり、カダザンドスン多民族文化の調査、文書化、保存、発展および普及など多面的活動を行っています。現在、KDCA は、民族の最高指導者 (Huguan Siou) である Pairin 氏により率いられています。

民族の統合後、彼らの人口は増え続け、サバの主要な米生産者として繁栄しています。カダザンは、肥沃な低地を使用して水稻を生産し、ドスは、内陸部の丘陵地帯を耕し香りの良い陸稲を生産しています。以前の彼らは、米の栽培、収穫、保管に関わることで生活の中心を占めていたので、いろいろな面で米の生育の影響を強く受けています。

キリスト教やイスラム教が伝わる前には、彼らの祖先は、すべてのものに命が宿るという教えを信じ

ており、岩、木および川は生き物でした。全能の神で創造主である **Kinorohingan**、生存者の精神 **Koduduwo**、死者の霊 **Tombiruoh**、悪魔の魂 **Rongon** という主に 4 つの靈魂の存在を信じていました。

カダザンドスン族と日本人の容姿や嗜好性が類似しているのは、お互いに米を主食にする農耕民族であり、民族の遠い記憶に神話が宿り、自然を畏れ敬うという DNA を現代に遺伝しているからなのかもしれません。

Kinorohingan と妻 **Suminudu** は、一人娘 **Huminodun** を持っていたということからカダザンドスン族の創世記が始まります。**Kinorohingan** は、カダザンドスン族を創造するために **Huminodun** を犠牲にし、彼女の身体のいろいろな部分をあたかも種であるかのように植えました。粳つきの米は、**Huminodun** の身体の一部から生じたものであり、**Bambaazon** という米の精霊を形に表したものです。

毎年5月になるとカダザンドスン族は、サバ州全土で収穫祭 **Peata Kaamatan** の式典を行い、**Bambaazon** を崇め、供物を備えます。**Bobohizan** と呼ばれる地区の最高聖職者により式典が執り行われます。**Bobohizan** の仕事は、神秘的な身体から傷つけられて分離されてしまった **Bambaazon** を探し出し、式典に帰って来るようにすることです。この年中行事は、実に色彩豊かであり、カダザンドスン族の伝統や慣習および文化を理解する絶好の機会だそうです。儀式で打たれる青銅の銅鑼、**Bobohizan** による米の精霊の踊り、米から作る酒 **Tapai** や郷土料理などを楽しむことができます。収穫祭のハイライトは、収穫祭クィーンの選定です。黒のビロードに金の刺繍が入った民族衣装で着飾った乙女たちが登場します。栄冠を得る女王は、敬愛される **Huminodun** の持つ高潔なもののすべての象徴です。5月 30 日、31 日は州レベルの収穫祭の日であり、州の祝日に指定されています。

ラナウからサンダカンに向う高速道路を 50km ほど走ったところに、巨大な無花果の木を模して制作されたヌヌクラガンの碑があります。そこは、カダザンドスン族がその居住地をサバ州全土に拡大する前に、彼らの祖先が住んでいたと言われる、いわば民族発祥の地であり、ここで、彼らはヌヌクラガン文明を築き、栄華を極めたということです。毎年7月上旬に、**Huguan Siou** の栄誉を称え、民族としての自覚を新たにするため、この地に集い、式典と祭礼を行います。今年は、7月3日、4日が予定されおり、スラゴンホームステイのオーナーである **Othman** 博士が実行委員長です。毎年、この期間のスラゴン滞在者は博士のご好意により **VIP** として参加することができます。

カダザンドスン族の先祖は、ヌヌクラガンの地で人口が著しく増加し、近くで十分な食料を得ることが困難になったので、族長は、新しい適切な居住地を探索しに行くように命じました。タンブナン、ラナウ、ペナンパンなど西方面への移動とラブッなど東方面への移動が始まり、こうして彼らは、サバ州全土に拡大しました。いろいろな方向への移動は、いくつもの集団で行われ、各集団は、結束を固め、野獣や他の集団からの攻撃に備えてロングハウスを作りました。西に進んだ連中は、ブルネイ人と取引をして、銅鑼、銅および銀の腰帯や首飾りおよび腕輪を得ました。各地で領地問題が発生するようになり、'**Gayang**' (首狩用刀) や毒吹き矢を使った集団間の戦争がたびたび発生しました。首狩は状況を悪化させ、他の集団を攻撃するために離合集散が続きました。この状況は、英

国人の到来まで続いたそうです。

カダザンドスン族にとってキナバル山は神聖な山です。彼らの祖先は、死ぬと、彼らの魂は、神 **Konorohingan** が安らかな休息を与えてくれる場所、すなわち、キナバル山で永眠すると信じていました。キナバル山に登る前に、先祖の魂に、彼らの場所を訪問することと安全な登山を願うことはよいことです。また、山中で、騒いだり、動物を追いかけたり、一人で迷ったり、山から石や植物を採集すべきではありません、さもないと良くないことが起こるかもしれない。そこは、カダザンドスン族の先祖の霊が安らかに眠る場所なのだから・・・

参考文献：

- The origin of Kadazan/Dusuns'
<http://www.geocities.com/Hollywood/Academy/7637/kadazanDusun.html>
- Kadazan/Dusun <http://en.wikipedia.org/wiki/Kadazan-Dusun>
- "The origins and meanings of the terms "Kadazan" and "Dusun"
<http://kdca.org.my/archives/169>
- SABAH's PEOPLE & CULTURE
<http://www.sabahtourism.com/sabah-malaysian-borneo/en/culture/6-the-kadazandusun/>
- the moment Kadazandusun <http://www.a2z.com.my/kadazandusun>